



おまん様



川崎ゆきお

地方の小さな町で生まれ育った下田は村が嫌いだった。農村時代の村はもうなくなっていたのだが、それでも昔から住んでいる村人が多数いる。下田もその中の一人だ。

よく言われる村人氣質、排他的な村人根性を嫌った。その原因は下田家が、この村では有為な位置になく、羽振りがよくなかったためだろう。田畑も狭かった。

それで高校を出ると、すぐに都会へ出た。ここでは何処の誰その分家の何人目の子かというようなことは、問題にはならなかった。

「よくあることだねえ」下田の同僚が言う。

「ああ、昔のことだから」

「僕も田舎から出て来た口だよ。まあ、仕事がないからねえ、こっちへ来ないと」

「それで、最近思うのだけど」

下田は遠い目をしながら語り出した。

「今年のお盆に帰ったのだけど、色々あるんだねえ、この村も。暮らしているときは分からなかったけど、色々あるんだ」

「ああ、色々ねえ。その色々の中の何処が気になったの」

「妙なんだ」

「何が」

「知らなかったんだけど、うちの村は、妙な村なんだ。そんなものかと思っていたんだけど、違うんだなあ」

「じゃ、下田君の村だけにある、何かかい」

「風習かもしれない」

「ほう」

「生まれ育ったときから、そんな感じだから、何とも思っていなかったんだけど、やはり妙なんだ」

「どう、妙なんだ」

「表だっては誰も言わないけど、妙なものがあるんだ。それが風習だって気が付いたのは、最近なんだ。もう村を出てから十年も経つんだけど」

「どんな風習なんだ。まさかゾンビの村じゃないだろ」

「それなら、僕もゾンビじゃないか」

「そうだね。じゃ、日本に渡って来た吸血鬼が……」

「講って、知ってるかい」

「こう？」

「集まりのようなものだよ。君が好きそうな言い方をすると、秘密結社かな」

「ああ」

「おまん様って言うんだ」

「おまん」

「うん」

「それが、その講かい」

「そう、一寸口ににくい言葉だけど。おまん様の集まりが夜中にあったんだ。最初は何の集まりなのか、知らなかった。うちの家でも開かれたことがある。それを寄り合いとか講とか言って、決しておまん様とは言わないんだ。知ったのは最近だよ。言いにくいけどね。おまん様」

「おまんだからねえ」

「まあ、村人っていうか、昔から住んでる人は決しておまん様と口にしない」

「恥ずかしいからじゃない」

「いや、口にしてはいけないんだ。だから、知らなかったんだ」

「ほう」

「おまん様は仏壇とは別にあるんだ。子供だったから、仏壇だと思っていたんだけど、家に仏壇が二つある。近所の家もそうなんだ。だから、家に仏壇が二つあるのが普通だと思っていた」

「そうだね。一つにまとめればいいのにね」

「大人になってからは、仏壇が二つあるのは、古い仏壇を捨てないで残していると思ったんだ。よくあるような古くて小さな仏壇だよ。開けたところを一度も見たことがない。鍵が掛かっているんだ。子供の頃からそんなものだと思っていたんだけど」

「いかがわしい仏さんのようなものを祭っているんじゃない？」

「まあ……」

「おまん……か」

「それで、今年のお盆に帰ったとき、気になって、婆ちゃんの針箱の奥から鍵を見付けて開けてみたんだ」

「何だった？」

「それは言えない」

「ほう」

「言えない」

「秘密だからかい。でも、おまん様信仰はどうなの」

「どうなの、って？」

「その信仰のため、タブーなんだろう。言えないのは」

「どんな信仰か知らない」

その同僚の口元が緩んだ。

「中を見たんだろ。御神体か、ご本尊。そのまんまじゃなかったのかい」

「何かよく分からなかった。変な木の塊でよく分からない。言えないのはタブーじゃなく、分からないから。それに言ったら悪いことが起こるような禍々しさを感じたんだ」

「きっと、そのまんまのものだよ」

「そのまんまだから、おまん様か……」

「いや、マンだけを抜けばいい。マン、マンマ、つまりご飯だよ。豊穰の神様仏様だよ」

「うん、そう解釈したいよ」

「おまんま様に変えるべきだね」

「あまり変わらないと思うけど」

了